

284. 平成10年度滋賀県下における 発掘調査の紹介（その1）

本年度も、平成11年3月5日(金)に恒例の「第74回滋賀県埋蔵文化財センター研究会」が埋蔵文化財センターで開催されました。

県下では、本年度も数多くの発掘調査が実施され、その成果の一端が発表されました。ここにその一部を紹介いたします。今後の参考に活用いただければ幸いです。尚、寄稿くださいました方々に厚くお礼申し上げます。

1. 7世紀後半の製鉄炉を4基検出

大津市瀬田南大萱町 源内峠遺跡

源内峠遺跡は瀬田丘陵北側に位置し、これまでに昭和52年度と昭和60年度に調査が行われている。

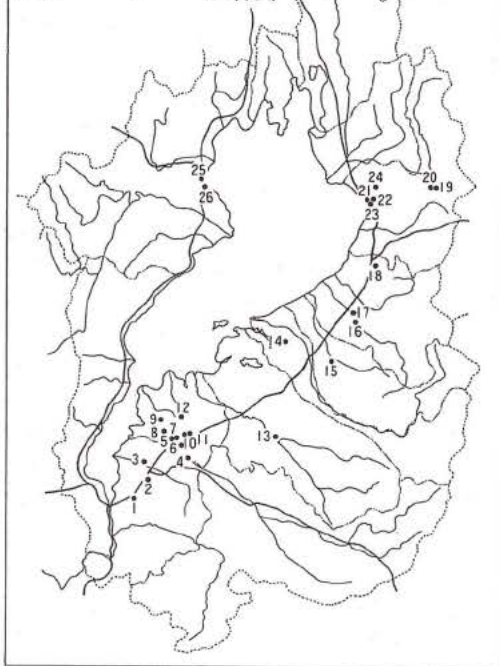
今回の調査は、びわこ文化公園整備事業に伴うもので、平成9年度から平成10年度にかけて対象地約3万㎡において試掘調査を実施した。調査の結果、7世紀後半の製鉄炉を4基検出した他、製鉄炉に伴う排滓場等の遺構を検出し、鉄鉱石、木炭、炉壁、土器、ふいごの羽口、鍛造剥片等の製鉄関連遺物の出土をみた。調査の成果をまとめるならば、以下の三点を挙げることができる。

第一に出土した土器から、検出した4基の製鉄炉は時期を若干違えながらも、全て7世紀後半に操業されたものであることが判明した点である。7世紀後半は



製鉄炉

1～11 滋賀文化財だより256(本文)
12～19 // 257(本文)
20～26 // 258(本文)



遺跡位置図（位置図の番号は本文と同じです）

近接する大津宮や、本格的都城である藤原京が営まれた時期であり、源内峠遺跡の操業時期と、宮都造営をはじめとする律令国家建設の年代的な関連性を示唆している。また『日本書紀』670年(天智9)の「歳年、造水碓而冶鉄(水うすを造りて鉄かわす)」という記事との年代的対応という点からも注目される。

第二に製鉄炉の構造が判明した点である。製鉄炉は4基とも長さ2.5m前後、幅0.4m前後の、平面長方形を呈する「箱形炉」で、その規模は7世紀後半の製鉄炉としては全国的に最大級といえ、その技術力の高さが想像される。なお検出した製鉄炉の炉床下の地下構造は全て異なっており、7世紀後半という短期間での製鉄炉地下構造の変遷を追うことができた。

第三に出土した製鉄関連遺物が部分的調査であったにも関わらず重量で約20t出土しており、遺跡全体では100t近い製鉄関連遺物が包蔵されていた可能性があ

ることが判明した点である。この量は7世紀後半の製鉄遺跡としては全国的にも突出しており、その生産量が膨大であったことを裏付けているといえよう。

(財)滋賀県文化財保護協会 大道和人)

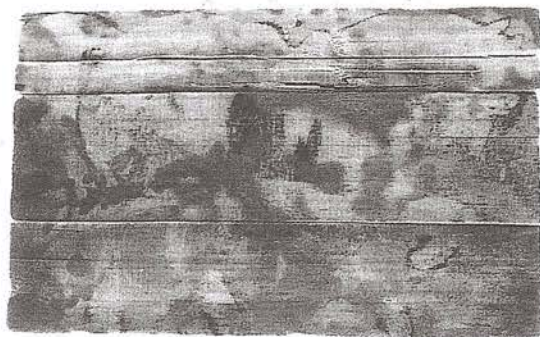
2. 井戸から奈良時代後半の遺物が出土

草津市 大^{たいしやうぐん}将軍遺跡

大將軍遺跡は、瀬田丘陵の先端部に位置する縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。今回、民間開発に伴い、約610㎡の発掘調査を実施した。主な検出遺構として、掘立柱建物跡4棟、井戸2基、区画溝などがある。特に、井戸1基からは奈良時代後半の多種多様な遺物が出土した。

井戸は、直径約2.2m、深さ約2.8mの規模で、下層から墨書土器を含む奈良時代後半の土器がまとまって出土した。墨書土器は3点あり、人名と思われる「稲万呂」と記す土師器皿と須恵器杯の2点と「甲久？」と記す土師器皿1点である。その他の出土した遺物として絵馬、方形の宝珠つまみを意識した蓋1点を含む曲物蓋数点、柄杓の杓、斎串などの木製品や大型の鉢と考えられる漆器製品などがある。

中でも絵馬は、縦16.5cm、横26.5cm、厚さ0.6cmのヒノキ板いっばいに右向きの姿が描かれている。上端から0.5cm中央よりやや右側の位置には紐を通す穴が設けられている。馬は、耳や背中、尻尾、足先や鞍などの輪郭には墨痕が見られるものの、輪郭内については墨痕や彩色は認められなかったが、紫外線を照射した結果、何らかの彩色が施されていた可能性がある。また、板は年輪年代法の測定によって、原木の伐採時期は、西暦776～800年代に推定され、伴出した土器からも奈



絵 馬

良時代後半のものと考えられる。

本調査区から14mほど北東で、平成5年度に調査された井戸の最下層からも、木簡とともに「稲万呂」と墨書きされた須恵器杯が出土しており、当該調査地域が「稲万呂」という人物の居宅が存在していた可能性

と大將軍遺跡内において当該調査地一帯が官舎の施設の設置区域に充当されていたと推定される。

(草津市教育委員会 楠部博世)

3. 弥生中期の玉つくり関連遺物出土

草津市 門ヶ町^{もんがまち}遺跡

門ヶ町遺跡は、平成7、8年度の調査で周溝を巡らせた中に柱跡が密集する弥生中期の遺構が検出され、周辺より出土する遺物や他遺跡の調査例より、玉つくり工房跡の可能性が考えられた。

今回の調査地は、その南側に隣接する部分で、同じく弥生中期の溝跡や柱跡、土坑等が多く検出された。前回の調査ほど明確な周溝状遺構は認められなかったが、不連続の溝に囲まれた柱跡群が検出され、溝内より緑色凝灰岩原石、玉砥石^{りよくしよくごうかいがん}、管玉未製品等の玉つくりに関連する遺物が出土した。このことから、今回の調査地でも玉つくりが行われていた可能性が高くなった。

また、調査区西端で幅約2mの2条の溝跡が、7～8mの間隔をあけて、平行に南北方向へ延びて行くのが確認された。この2条の溝跡の東側では、弥生時代の遺構が密集して確認されているが、西側では遺構の存在が認められなかったことから、集落西限を画する溝であったと考えられる。2条の溝のうち西側の溝は調査対象地外へ延びて行くため、延長部分を確認することはできなかったが、東側の溝は試掘の結果、南の方へ延びて行くことが判明した。

今回の調査では、弥生時代の遺構に重複して鎌倉時代の柱跡、溝跡、井戸跡、土坑等も検出された。これまで門ヶ町遺跡の調査では、中世の遺構がまとまって検出された例はなかったが、当遺跡が東山道に近接して存在することや、中世城郭である渋川城の所在地に推定されていることから、中世段階に交通の要衝に位置する大規模な集落が存在していたことが想定できる。

(草津市教育委員会 藤居 朗)



集落西限を画する溝跡

4. 中世の屋敷地や奈良時代の土馬を発掘

栗太郡栗東町大字林 林遺跡

林遺跡は近江最大の河川である野洲川が沖積平野へ流れ出した扇状地上部の標高110m付近に立地する遺跡である。これまでの調査はいづれも小規模なものであるが、古墳時代の堅穴住居等が確認されていた。また、遺跡内には車塚、大塚、当調査地の藤塚などの小字名が残っていて、地割などからも削平された古墳の存在が推定されている。

今年度の調査は住宅地造成に先立ち面積1,893㎡で実施した。

検出した遺構は12～14世紀の掘立柱建物8棟以上、水路、区画溝、土坑墓1基、土坑7基等である。

掘立柱建物は最も大規模なもので6×4間、面積は108㎡である。溝で一辺40m程の区画がつくられ、その中央に建物が配置されている。土坑墓SK349は長辺1.7m、短辺1.1m、深さ30cmで、土師皿9点と瓦器皿1点が副葬されていた。SK513は長辺3.8m、短辺1.8m、深さ90cmの土坑で、黒色土器碗や土師皿数点の他、釜が13点出土した。釜は大小さまざまな形のもので、底部を欠損するものの完形に近い状態で検出された。釜が土坑に一括で廃棄された類例は少なく貴重である。

SD256は幅3～4m、深さ1mの水路で、中世の遺



土坑 SK513

物に混じって少量の8世紀の須恵器とともに土馬が出土した。土馬は胴部から接合面ではがれ落ちた頭部、前足、後足各1本と鞍で、前足の長さは9.5cm、太さは先端で直径4cmである。

栗東町内での土馬の発見例は、栗太郡街の岡遺跡、官衙の手原遺跡、辻遺跡に次ぐ4例目で、出土遺構は古墳の周溝、溝、川で、いづれも水に関わっている。

林遺跡では初めての本格的な調査となったが、以上のような調査成果を得ることができた。

(財栗東文化体育振興事業団 佐伯英樹)

5. 弥生時代後期の区画溝を確認

栗太郡栗東町大字下鉤 野尻遺跡

野尻遺跡はJR東海道本線（琵琶湖線）栗東駅の東側、大字野尻、下鉤に広がる縄文時代以降の複合遺跡である。過去の調査では、1988年に溝と柵を方形に巡らせた5世紀の豪族居館が確認されている。弥生時代の遺構としては、住居は検出されていないが、自然流路や溝があり、土器の他銅鏝1点等が出土している。

今年度は工場内で事務所建設に先立ち、500㎡の面積で調査を実施した。

検出遺構は弥生時代後期の溝2条、堅穴住居1棟、時期不明の建物1棟、古墳時代前期の流路である。遺構面は耕作土直下で、堅穴住居の深さが約5cmであり、かなりの削平を受けていることが分かる。

溝SD7は幅2m、深さ90cm。断面形態はV字に近い逆台形で、礫層にたつて掘削を止めている。長さ6mにわたり検出したが、90cmの深さを保ち突然途切れており、この事実からSD7が通常の水路ではなく、環濠などの区画施設であることが分かる。埋土は人為的に埋められたブロック層で、一部に土塁崩落層も認められた。遺物は弥生時代後期前半の土器が比較的良好な状態で50個体以上出土した他、石錘又は岩偶状の石製品1点が出土した。

溝SD1は幅65cm、深さ45cmのV字溝で、庄内併行



溝 SD7

期に埋没したようだ。

堅穴住居SH2は6×5.5m、東側壁の中央に2段構造の方形屋内土坑がある。弥生時代後期の土器と鉄製品が床面から少量出土した。

その他六角形に配置された柱穴を確認した。時期は不明だが、掘立柱持柱建物が、削平された堅穴住居である。野尻遺跡は、近江の弥生時代を代表する伊勢遺跡と下鉤遺跡の中間に位置し、今回時期的にも両遺跡の間を埋める資料を得たことは、この地域の弥生時代を考えていく上で重要な成果となった。

6. 近江最古級の須恵器が出土

栗東町辻 辻遺跡

辻遺跡は、縄文時代前期から近世以降まで続く複合遺跡である。なかでも古墳時代は、これまでに300棟以上の竪穴住居が確認されている。また碧玉製玉作工房や、渡来人の存在を示す韓式系土器や陶質土器が出土するなど、大きな成果が得られている。

今回の調査は、民間の宅地造成工事に伴う調査で、確認された遺構・遺物は、縄文時代後期と考えられる包含層、古墳時代から白鳳時代の竪穴住居、墓の可能性をもつ土坑や方形に区画された溝などが存在する。竪穴住居は、4世紀代のもの3棟と、7世紀代のもの3棟が存在する。前者は、住居のほぼ中央に炉を設け、南辺中央付近に土坑をもつ住居が主体である。後者の住居はカマドをもつ住居で、そのひとつには住居廃絶後、カマドからのびる焼土、炭灰面に小礫を意識的に並べた祭祀的な様相を示す部分がみられた。方形に区画された溝は、東西約14m、南北約12m、幅0.8～1mの規模をもち、深さは20～30cmと浅めの溝である。注目すべきことは、この溝の北辺中央付近から、近江最古級となる初期須恵器がまとまって出土したことである。その構成は、杯身2、高杯2、蓋3の合計7点である。杯身は、底が平坦になるタイプと、底が丸みをもち、深みのある羽釜形をしたタイプが存在する。高杯は2点とも無蓋高杯で、脚部にスカシをもつタイプと、もたないタイプが存在する。これらの須恵器は、形態および胎土などの特徴が大阪の陶邑周辺で焼かれ



初期須恵器出土状況

たものに類似している。もし陶邑周辺から運ばれてきたものとするれば、その背景には中央政権との関連が浮かびあがってくる。近江では、これまでにいくつか初期須恵器が出土していたが、近江で焼成されたものなのか、他地域から運ばれてきたものなのか明確にされていない。今回の発見は、この問題を問うひとつの手

がかりとなるであろう。

(財)栗東町文化体育振興事業団 近藤 広)

7. 日本最小の「小銅鐸」出土

栗東町下鈎 ^{しもがかり} 下鈎遺跡

栗東郡栗東町に所在する下鈎遺跡は、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。とりわけ弥生時代中期後半には、環濠集落^{かんごうしゅうらく}の存在が想定され、また同後期後半には大型掘立柱建物等からなる集落が検出され、拠点集落として知られている。このたび、河川改修工事が計画され、それにともない平成9年度より発掘調査を実施中である。

平成10年度調査では、弥生時代中期後半頃を中心とする時期の溝・掘立柱建物・土坑・ピット群等の遺構を検出した。なかでも注目されるのは、弧を描きながら平行する溝3条のうちの1条から出土した小銅鐸1点である。小銅鐸は、溝検出面から約0.14m下方の埋土中に、やや傾いているもののほぼ立位で出土した。掘方等の痕跡は確認できず、溝の埋没過程で濠内に入り込んだものと考えられる。

小銅鐸は高さ3.4cm・底径2.3cm×1.66cmをはかる小型



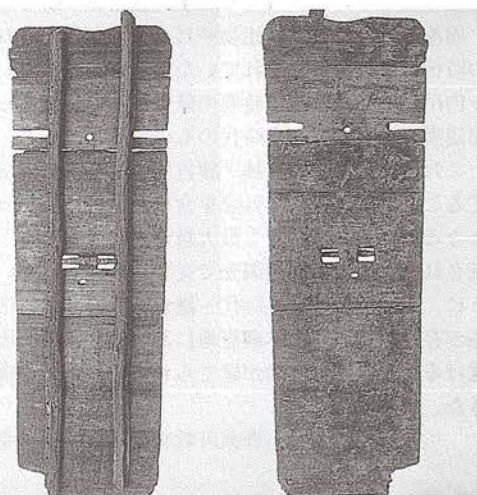
小銅鐸が出土した調査トレンチ

品であり、現在知られる小銅鐸のなかでも最小例となる。身は裾付近で若干外反している。鰭はなく、文様も確認できなかった。内面は平滑で突起はない。身の各側面には型持孔が2孔ずつある。上面にも型持孔が1孔あるが、これは本来2孔であったものが、鑄損^{いそん}によって連結したものである。小銅鐸の所属時期については、時期を判定できる遺物を伴出しなかったため、今後の整理作業により、溝の上下層の遺物群を検討し、確定する必要がある。現状では、弥生時代中期後半～後期頃という大まかな年代を与えておきたい。

今回出土した小銅鐸は遺存状態が良好で、出土状況も明確であることから、小銅鐸の正確を考えるうえで重要な資料となろう。今後の調査研究の進展が期待される。

8. 下之郷遺跡の内環壕から木製の盾が出土
守山市下之郷町 下之郷遺跡

下之郷遺跡は、弥生時代中期後半の環壕集落である。これまでの発掘調査から、集落規模は3～9条の環壕で囲まれた東西が約420m、南北約370mの範囲にわたることが判明した。現在は、国の補助事業で重要遺跡の確認調査を進めている。発見された盾の出土地点は、集落北東の多重環壕部分で、もっとも内側の壕の底から大量の土器や木製品などと併に出土した。盾は、全長105cm、幅上端で36cm、下端で約30cmを測るもので、ほぼ完全な形を残している。スギの柃目板4枚を横に並べ、裏面に2本の補強材を通し、植物を撚った紐で縫い合わせている。また、2本の補強材の中央部には把手が渡してあり、握りの部分には植物繊維が巻かれている。表板はたいへん薄く作られており、表面に残る加工痕から鉄製の前手斧で仕上げられたものと推定



楯(裏面)

楯(表面)

される。表板に使われたのは、木目の細かなスギ材で、木取りは柃目取りをしていたため、奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏に年輪年代測定の分析を依頼した。分析の結果、この盾の板材の4枚は全て同一の樹木から伐り出されたものと判明し、その内のもっとも新しい年輪は、紀元前223年に刻まれたものと判定された。その年代が得られた板材には25mmの白太が残っており、さらに外側に25mmの辺材が想定されたため、約37本の年輪が欠落しているものと推測された。従って、この盾に使用された樹木が伐採された年代は、推定で紀元前190～180年頃と判定された。盾が出土した土層からは、近畿第Ⅳ様式初頭(凹線文出現期)の土器群が多数出土している。推定伐採年代が、即、弥生土器の年

代と結びつけて考えるわけにはいかないが、弥生時代の暦年代を考えるうえで貴重な資料を追加したといえる。

(守山市教育委員会 川畑和弘)

9. 新たに弥生時代中期の集落を発見
守山市勝部町 山田町遺跡

山田町遺跡は民間の宅地造成工事に伴う試掘調査によって新しく発見された遺跡である。調査地は市立守山女子高等学校の南隣の水田地で、約3,500㎡を対象に調査を実施した。

調査の結果、弥生時代中期末とみられる堅穴住居、井戸、土坑、大溝等遺構や大量の土器が出土し、この遺跡が当初予想もしなかった弥生時代中期の集落遺跡であることが明かになった。大溝のうち北側の2条は円弧状に湾曲しているのに対して、南側の溝は幅4～5m、検出面からの深さ1.5m～2mと規模も大きく、ゆるやかに湾曲しながら東西方向に延びている。調査当初はこの溝を集落の内と外を分ける溝であると考えたが、その後溝の外側からも堅穴住居などが検出されたことから、集落はさらに南側に広がることが確認された。ただ、大溝とその他の遺構には一部切り合いのあるものもあり、遺構の変遷も含め、大溝の性格については今後の検討課題である。

山田町遺跡の周辺では、ほぼ同時期の方形周溝墓も数地点で確認されており、この集落が墓域をもったかなり大きな集落である可能性も考えられる。今後、さらに調査が進めば隣接する伊勢遺跡の成立を考えるうえでも重要な資料となろう。

(守山市教育委員会 小島睦夫)



山田町遺跡全景

10. 弥生時代中期から後期の墓域を確認

野洲町小篠原 小篠原遺跡

小篠原遺跡は、JR琵琶湖線野洲駅の東側一帯に広がる、縄文時代から中近世にいたる複合遺跡である。近年の調査により古墳時代初頭の周溝墓群や削平された古墳が発見されており、集落域と墓域との関係が注目されている。

今回の調査は、公共事業の代替用地の造成に先立ち行なったものである。当地は昭和55年度に試掘調査が行なわれており、平安から鎌倉時代の南北溝および弥生時代後期から古墳時代初頭の土器等を確認している。今回約1,900㎡を調査し、上層で旧野洲郡役所跡と^{かんぎょうかん}勸業館跡と思われる建物の基礎を、下層で周溝墓3基、土壙墓7基、竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、溝、ピット、土壙等を検出した。



方形周溝墓と竪穴住居

旧野洲郡役所跡と思われる基礎は、こぶしぐらいのぐり石が幅約1m、深さ0.8m前後にぎっしりとつめられたもので、一部遺構面にまで達しているものもあった。^{かんぎょうかん}勸業館跡のほうは、幅0.8m～2.0m、深さ0.3m～0.4mで、ぐり石も小さいものであった。

周溝墓は、方形のもの2基、円形のもの1基を検出した。出土遺物が少なかったが時期は、概ね弥生時代後期と思われる。土壙墓は、7基のうち2基で遺物が出土しており、1基からは弥生時代中期の高杯の脚部が、もう1基からは同じく中期の大型壺、甕などが出土した。竪穴住居のうち1棟は、5.2m×5.8mのプランで、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての甕や壺などが出土した。

今回の調査で、昨年発見された周溝墓群より時期の古い墓域が確認されたことは意義のあることである。今後は、下々塚遺跡など隣接する周辺の調査結果を加味しながら、小篠原遺跡の墓域と集落域との関係を明らかにしていくことが課題である。

(野洲町教育委員会 松田 学)

11. 二重周濠をもつ前方後円墳の調査

野洲町小篠原 小篠原遺跡

小篠原遺跡は、現在のJR野洲駅の東側一帯に東西1km、南北0.9kmの範囲に広がっており、縄文～中近世に至る複合遺跡である。遺跡の中心部からは多数の掘立柱建物が検出され、野洲郡統一条里の主軸方位とは異なる特殊地割の存在からも、古代野洲郡衙推定地とされている。また平成5年に発見された「林ノ腰古墳」は、5世紀後半の前方後円墳であり、木製埴輪や形象埴輪が出土するなど注目を集めた。

本調査地はこの林ノ腰古墳の周濠部分にあたり、平成10年10月5日～同年12月15日にかけて調査を行った。調査地内に3箇所のトレンチを設定し掘削した結果、従来から想定されていた林ノ腰古墳の外濠が検出された。中からは内堤に据えられていたと思われる円筒埴輪や形象埴輪に加え、奈良時代の須恵器が出土した。また、外濠内には細い2条の溝が掘り込まれていたが、上層の遺物と時期差は見られず、性格は不明である。

周濠の外には掘立柱建物やピット群が検出され、後の時代には集落が営まれていたことがわかった。ピット内出土遺物は細片で時期の確定は不可能であったが周辺調査から概ね奈良時代のものであると思われる。

これらの結果から、林ノ腰古墳には2重の周濠がめぐることが確認され、外濠を含めた総長は155～160mとなることから県下でも最大級の古墳であることが実証された。また、周辺調査で従来からいわれているように、少なくとも奈良時代～鎌倉時代の間は古墳の周濠が存在しており、本調査地においても古墳の周濠を避けるようにして建物が建てられていることが確認できた。

(野洲町教育委員会 中村幸代)



小篠原遺跡1トレンチ全景